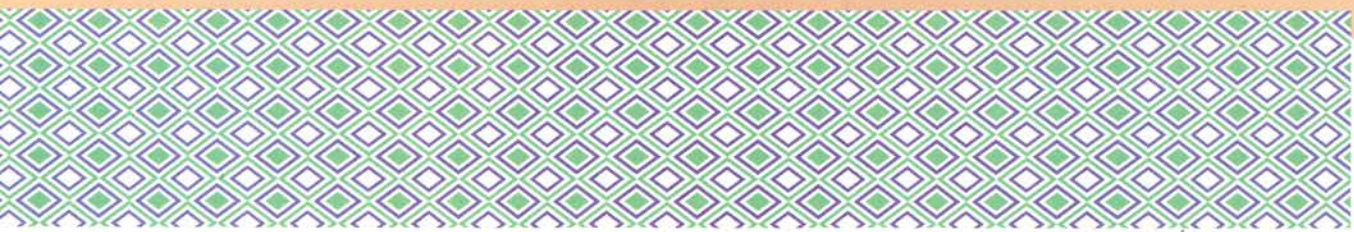
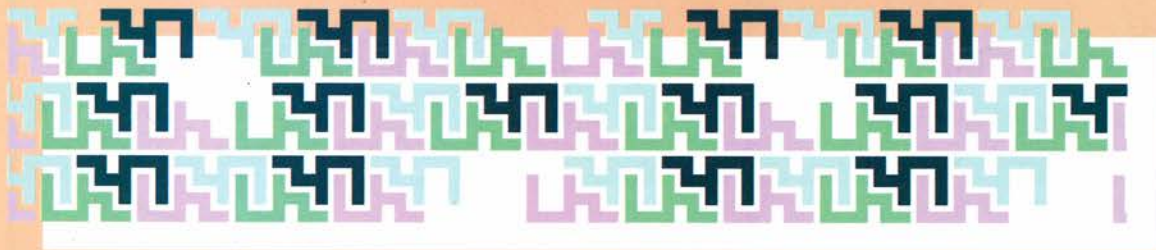


ともに担い、ともに築く、^{ひと}女と^{ひと}男の情報誌



・特集 みんなでエンパワーメント

No.30



特集

みんなでエンパワーメント



私は何をしたいのか
何ができるのか
自分さがしからスタートです

エンパワーメントとは：
もともと持っている力を
発揮できる状態にすること
持っている技術に磨きをかけること
周りの人と協力して
力を発揮できる環境を作り出すこと

身近なところから
できるところから 始めましょう

私だってもっと何かできるはず
そう思ったことはありませんか

その気持ちからエンパワーメントの第一歩

ねっとわあくNo.30
もくじ

特集

みんなでエンパワーメント ... 2

提言 **新しい男女共同参画社会をめざして** 4
～女性のエンパワーメントとは～
 愛知淑徳大学 國信 潤子教授

体験 私たちのエンパワーメント

長泉町 青木 早枝子さん 6
 静岡市 杉本 彰子さん 7
 袋井市 稲葉 ゆり子さん 8
 清水市 鈴木 明与さん 9
 静岡県 もくようの会 10
 裾野市 真田 恵さん 11

コラム 本だな 8
 今、学校では 10

図表 知っていますか こんな数字 12

話題 **トピックス** 14
 男女混合名簿 14
 サッカー レフリースクール 14
 ふるさと通信 15

新しい男女共同参画社会

愛知淑徳大学 教授
國信 潤子(談)

女性のエンパワーメントとは

● 性差別の構造

女性問題は、社会問題として認識されにくいもので、もう差別はないと思っている人が結構多いですね。しかし、セクシュアルハラメントや夫の暴力など、多くは私的な関係で起こることが多いから、他人が口出しすればプライバシーの侵害になり、女性がこれを問題にすれば、「女性の方に問題がある」というように女性が批判される。あるいは女性の労働についても、女性はパートタイマーでいいのだと思われていたりで、これらが差別であると理解されないのです。

そして、他の人権侵害と同様に、社会的優位にある社会的強者が、「個人の資質に欠点がある」といって、弱者性をつくっているのです。でも、社会的弱者というのは個人の資質に欠点があるのではなく、そう思わされているだけなのです。

例えば男性の管理職などが「女は出産、育児をするから生産効率が悪い」という。女性の研修は、お茶汲み、電話の受け答え程度で、仕事は単純事務、補助業務。男女の間に差が見えてきて、多くの女性が5年以内でやめていく。そうすると、それを見ている女性は、

をめぐって

「やっぱり女性は仕事ができない。私もできない」と自分で自分を卑下するようになるのです。これを自己差別といいます。

もちろん、それを理由に甘えている女性もたくさんいます。すると、女性たちの間に分断が起こります。例えば、フルタイム対専業主婦というように。連帯できないということにも弱者性があるのです。

医学者ジョン・マナーは、「生物学的性とは、受精、妊娠、出産、哺乳の四つのみであり、それ以外のらしさとか心理とか行動様式とかは、すべて文化によって作られるものである」と明言しています。従って、「女だから○○ができない」というとき、女性の資質に問題があるのではなく、そのように育てられてきているということなのです。これは幼い時からのすり込みなんです。

● 性別役割分業の打破

文化によって作られてきたものならば、文化によって作りかえなければなりません。「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業を打破することが男女平等には不可欠なのです。これは、一九七九年に国連総会で採択された女性差別撤廃条約の基本理念となっています。

ます。

男女共同参画とは、固定的な性別役割分業を打破すること、男女が社会の対等な構成員として自らの意志によってあらゆる分野で活動ができること、しかも参画すること。そして、政治、経済、社会、文化、あらゆる領域の利益を、女性もまた、男性と均等に分配されるべきであるということです。参画とは、計画、企画を作る段階に入ることです。では、なぜ「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業が差別になるのでしょうか。

「男は男らしく、女は女らしく、それぞれ得意な領域で能力を発揮すればいい。機能がそれぞれ違うのだから、それで違うことをやって平等だ」といわれると、多くの人が「ああそうかな」と思ってしまうのです。このような考え方を機能平等論といいます。しかし、これでは男女平等は達成できないのです。

なぜなら、「女性の権利は人権」ということです。人権の基本は、「自分で自分の身体を守ることができる」ということ、そして「思想、言論の自由」「財産権」「労働権」が基本なのです。つまり、女性が自分で働き、自ら賃金を獲得することができること、これは人権の一部なのです。

ところが、家庭の中で行われる仕事は労働なのに報酬がつかない。同じ労働であつても、市場で行われれば金がつき、家庭で行われれば金をつかないのです。

もちろん、家事労働に賃金をという話もあり、日本は、配偶者特別控除やサラリーマンの妻の年金積立義務の免除など、特別控除を作りました。このため、103万円以上稼ぐと損だと思ひ、外で働かない、あるいは、パートなど低賃金で働くという女性が多いですね。しかし、配偶者扶養手当などの金額を計算してみると、一か月平均3万円です。それとも夫の給料に上乘せされる、つまり、夫の給料が上がるだけなのです。これはあくまでも夫あつてのサポートです。離婚したらなくなりません。配偶者扶養手当だけでは女は絶対に自立できません。

それに、親から土地などの財産を継承しても、収入のない女性は、税金を払えませんから、夫との共同名義にしてしまうことが多い

です。これでは、憲法で保障されていても、実際には、多くの既婚女性には財産権はないということになります。

つまり、女性が夫を経済基盤にする限り、女性の人権は守られないということなのです。だから、一方の労働に賃金がつき、一方の労働に賃金をつかないならば、これを両方の性が半分ずつ分け持つべきなのです。仕事も家庭も男女が共に責任を負うべきなのです。

● 日常からの変革

では、私たちは何ができるかということを考えてみたいと思います。

最初に、自分自身に問い掛けてみてください。自分自身を卑下していませんか。何かしたくないときに、家事・出産・子育てを理由に逃げてないか。自分自身は社会的な責任を負うべく努力しているかということですね。

そして、自分が一番必要だと思ふこと、関心があることで、一歩踏み出してみることで

す。たとえそれがボランティア活動でも、低賃金であつてもです。そこで、家庭以外の人間関係を学ぶのです。自分で動き回ることができる限り、「これだ」というものに必ず出会います。

私もその体験を踏んできたのです。専業主婦をしていたとき、女性問題に気付き、自宅を事務局にして、日本女性学研究会を作りました。最初はボランティア活動だったのです。女性たちの社会活動の場という、地域の活動、それも福祉領域が多いのが現状です。しかし、そこで、社会的な役割を発見し、有償化し、それを社会的に認めさせていくという運動をしていかなければいけないのです。

せめて次の世代は、そういうプロセスを経なくてもいいように、子どもを教育していくことですね。まず、子育て環境から変えていきましょう。洋服の色や遊びなどを男女で区別しないこと、つまり「男だから、女だから」と決め付けないことです。また、夫婦が両方、家事や育児をするのが当たり前としていくことです。

基本的には、女性の自己確立。それから、女性であるならば、立場が違つても価値観が違つても、連帯できる何かがあるはず。女性の間での連帯を深めていくこと。そして、それを理解する男達をどんどん引っ張りこむことも必要だと思います。

やはり、男も女も自立しておくこと、そして、女達が動き出さなければ、何も変わらないということをお伝えして終わります。

(本文は、昨年10月26日に行われた「しずおか女性カレッジ特別講座」の抄録です)

プロフィール

國信 潤子 (くにのぶじゅんこ)
愛知淑徳大学現代社会学部教授、ジェンダー・女性学研究
所所長。専攻は女性学、ジェンダー論、フェミニズム論。
アジア・太平洋社会協議会(ユネスコ傘下組織 本部イン
ド・ニューデリー) 常任理事なども務める。著書に「女た
ちのカリフォルニア」(勁草書房) などがある。

私たちのエンパワーメント

第4回世界女性会議以降「エンパワーメント」という言葉をよく聞くようになりました。「エンパワーメント」とは、「力をつけること」と訳されています。

ここでは、自分の培ってきたものを土台に、可能性を信じ、行動した方々を紹介します。これから、一步を踏み出すあなたのヒントになることを願っています。

ハートのドアをノックして

生きがいサポートルームふいらんソロビー代表

青木 早枝子さん

原点は幼児教育

JR三島駅から少し離れた住宅地。緑のハートのマークが印象的な、建物があります。「生きがいサポートルームふいらんソロビー」そこには、青少年問題や子育て、地域社会の活性化を考えている女性があります。その人は青木早枝子さん。

青木さんは幼稚園教育から、社会教育へと異例の異動を体験し、そして、社会教育課長となりました。当時は、役付きの女性職員も少なくそれまでの教育現場とは異なり、驚きと葛藤の日々だったようです。しかし、ここでの経験が、教育や自分の生き方を問い直す機会となりました。

青木さんは、教育の原点は幼児教育にあると考えています。現代社会は、「繁栄」と「利便さ」を求め

続けた結果、大切なものが失われてきました。21世紀を生き抜くためには、それをもう一度見つめ直す必要があります。今がそのタイムリミットだと青木さんは考えました。平成8年3月長泉町を退職し、23年間の幼児教育と5年間の社会教育の経験をもとにした子どもから大人までが関わる生きがいサポートルーム「ふいらんソロビー」を発足させました。

愛がいつばい夢がいつばい

「ふいらんソロビー」とは、ギリシャ語のフィランソピアを語源とし「人を愛する」という意味をもつそうです。

相談室「ふらっと」は、子どもから大人まで、小さな悩みから大きな夢まで、何でも相談にのります。ふあみりールーム「こどもの城」では、保護者が安心して働けるように、あたたかい家庭の雰囲気でお託児をしています。

学習活動の一つを紹介すると、子どものための「あそび塾」は、外遊びの少ない環境にある子どもと、自然の中に飛び出して、すてきな体験をいっぱいする講座で、実施日は第四土曜日です。大人のためには、子育てやストレスなどの悩みを、ゲストを囲み車座になって語り合う講座もあります。その他にも



子どもに絵本を読み聞かせる青木さん

ユニークな活動が目白押しです。ゲストやスタッフは、専門家から、おしょうさん、大学生、子ども好きなおじさん、おばさんなど楽しいメンバーです。「ふいらんソロビー」ができるまで聞きつけ、幼稚園のときの保護者や心をついに働いてきた先生方、社会教育で関わった人々や、地域の人々が、かけてくださり、大きな励ましをいただき、拠点ができあがりました」

心と心のふれあいを

「金子みすずの私と小鳥とすずとの中に『みんなちがって みんないい』という言葉があります。その詩のころを、この活動の中で大切にしています。スタートして2か月しか経っていませんが、このような拠点の重要性と責任を感じています。退職金が尽きたらアルバイトをしても、この城を維持していきたいと思います。生きていくうちに、やりたいことがいっぱいありすぎて…間に合うかな」と笑

「こんなのがあったらいいな」から始めて

静岡ウーマン（ハウスクリーニング）代表 杉本 彰子さん

資本金5万円から

自分の能力を活かし、自ら経営者として起業する人が県内にも増えてきました。その中で、生活者としての視点を活かした分野で活躍する有限会社「静岡ウーマン」代表取締役の杉本彰子さんもそんな起業家の一人です。

「女性だから気が付くことがあり、身近にこんなのがあったらいいなと思って、資本金5万円での仕事を始めたんですよ、今では笑って話せるけど」と語る杉本さん。

夫が急死し、小さな子ども2人を抱えて働く中で、ベビーシッターや家事サービス等があったらいいなと思いました。そこで、12年前、自分が欲しかったベビーシッティングサービス、老人介護、清掃等家事サービスの事業を「静岡働く母の会」という名称で始めました。しかし、当時は、ベビーシッターや老

いながら青木さんはいいます。

極限まで追いつめられて駆け込んできた子どもも、今ではすっかり元気になりました。そんな姿が、青木さんやスタッフの活動の糧になっています。また、大人が遊ぶ施設がどんどん増える中で、青少年が健全に集える施設ができたらと切望しています。

青木さんは「生涯現役」と考え「一度きりの人生を、どう生きるかと問いつつも夢」を追い続けたい」とエネルギーに話してくれました。

人介護に対する賠償保険料も高く、静岡でのお客さまのニーズも少なかったのです。

そこで、建築物引き渡し前の掃除、一般家庭のハウスクリーニングの需要が増えたのを機に、昭和62年4月、清掃全般に一本化しました。当初はモップ、バケツ、脚立、洗剤などの最小限のスタートでした。かつて、秘書、経理、営業などの仕事はしていましたが、肉体労働をすることはほとんど初めてでした。清掃業務は家庭での掃除と違い、女性だけでは大変なこともありました。しかし、このサービスで喜んでくださる方が多く、とても励みになりました。



杉本さん（左）と専務の望月洋子さん（右）

いい人材に恵まれて

初めは、ワーカーも少なく、営業担当もいませんでしたが、現場で知り合った業者や知人の紹介で仕事を引き受け、安い、早い、丁寧、をモットーに、信用を得てきました。また、堅実に会社を運営し、汚れを一つとるにも試行錯誤を繰り返すなど地道な努力で、業績を伸ばしてきました。今では社員3人、パート社員20人で、うち男性も3人います。昨年から内装も手掛けるようになり、2年前に法人化しました。

ここまでやれたのは、創業以来、二人三脚で頑張ってきた専務さんと、一生懸命働いてくださるワーカーの方々のお陰だと、杉本さんは感謝しています。「私は、いい人材に恵まれました。小さい会社だけれどいいブレン、いいスタッフに恵まれています。どんな仕事も人間関係が基本ですね」

現場で働くワーカーの気持ちをお忘れないようにと、今でも現場に出ている杉本さんの姿勢が、会社発展のもとだったのかもしれない。

夢は24時間家事サービス

「昔は、ごく当たり前に隣近所が助け合う生活がありました。今は、近所のつながりが薄れ、助け合うことも少なくなりました。ハウスクリーニングをする中で、の要望も多く、心のケアを含めた家事全般のサービスを今回は24時間体制で行い、会員制で再スタートしました」（平成9年1月23日より事業部を設立しサービスを拡大した）この事業をライフワークとして、棺に足を踏み入れるまで続けたいと、杉本さんは考えています。

最後に、「私は、生活に関連したもののなかから、アイデアと工夫で起業しました。背伸びしないで、自分ができる範囲で行動すればいいし、一人の力でできないことも、10人集まれば大きな力になってできることもあります。まず、行動する勇気が必要ではないでしょうか」と結ばれました。